

# 第1回 国語

## 【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 問題は□から□まであります。試験開始の合図があったら、まず、□から□まで問題がそろっているかを確認、次に問題冊子の表紙と解答用紙に、「受験番号」「氏名」を記入すること。
3. 試験中は試験監督<sup>かんとく</sup>の指示に従うこと。
4. 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為<sup>こうい</sup>とみなすことがあります。疑われるような行動をとらないこと。
5. 試験終了<sup>しゅうりょう</sup>の合図があったら、ただちに筆記用具を置くこと。試験終了後に、書きこんだ場合は不正行為とみなします。
6. 解答に字数制限がある場合は、句点（。）・読点（、）・かぎカッコ（「」）も一字として答えること。
7. 問題文は、作問の都合上一部改変しています。

|      |  |
|------|--|
| 受験番号 |  |
| 氏 名  |  |



一

漢字に関する次の間に答えなさい。

問一 次の1～5の——線の漢字の読みがなを答えなさい。

- 1 新聞を編集する。
- 2 絹で織られた着物。
- 3 人脈を広げる。
- 4 他国に亡命する。
- 5 大きな城を築く。

問二 次の1～5の——線のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 ドクリんごを食べる少女。
- 2 ソウゴウ的に判断する。
- 3 ドウメイ国と協定を結ぶ。
- 4 ジシヤクを使って工作をする。
- 5 機関車のボウソウを止める。

二

漢字に関する次の間に答えなさい。

問一 次の①～③の「」にあてはまる漢字を一字で答え、慣用

句を完成させなさい。

- ① お米も野菜も使いすぎて、「」をついた。  
(意味) 一番奥にあるものまで出しきった状態。
- ② 困っていそうだったので、「」を貸した。  
(意味) 相手を自分が助けること。
- ③ 「」から火が出るほど恥ずかしかった。  
(意味) とてもはづかしい思いをすること。

問二 次の①・②の「」内のカタカナを、意味から考えて漢字

に直しなさい。

- ① 七転「バットウ」しながらも成長する。  
(意味) 転げまわって苦しむこと。
- ② 大器「バンセイ」を信じ、努力する。  
(意味) 才能は遅れて開花すること。

三

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

人類が集団生活をしている以上、ルールは必要不可欠だと思われる。

① 人類どころか、野生の動物にも、言語がなくてもルールはある。犬

やオオカミには、腹を見せた相手には攻撃こうげきしないというルールがある。

A エチオピアのオオカミは、草食動物のゲラダヒヒに狩かりを助けられているため、彼らかれを食べることなく共生している。あるオ

オカミがタブーを犯してゲラダヒヒの乳児を襲おそったとき、大人のゲラ

ダヒヒがそのオオカミに殺到さつとうして追い払い、事なきを得たという。こ

うしてみると、ルールは必ずしも言語によって明示される必要はな

く、当初は集団生活の中で個体が身体で知ってきた経験則の積み重ね

で生じたものだと言えよう。

そこで、まずは人類社会のさまざまな局面で現れ、定着している

ルールの諸類型を確認しておこう。

人間と動物に共通するルールの発端はつたんは、「縄張りなわばの画定」と「序列

付けの必要」にあった。縄張りは弱い種が他の個体や集団から自らを

防衛し絶滅ぜつめつを免れることまぬがに役立ち、序列付けは仲間内での破滅的な争

いを防ぎ、種の生存能力を増大させるために役立つ。これらのルール

の原型を、言語が発達していない段階の生き物は積み重ねられた経験

や遺伝子情報で獲得かくとくしたのだろう。

B

その後、感情や知性を「余計に」持つようになった人間は、独自にルールを発展させていった。集団内での序列を守るために、上位者に反逆する者には罰ばつが科されることとなった。また各人の財の所有を確実にするために「所有権」が生み出された。

そして人間が他の動物たちと決定的に違っていたのは、自然的な秩序じょに飽き足らず、それを解体して人為的な秩序じんいを作り、その新秩序を維持いじするためにこれまた人為的なルールを作ったことだった。

こうして人間社会にはさまざまな局面に則して多様なルールが発見されたり作られたりしてきた。それらを分類してみよう。

「X つてのは世界を回すためにある。お前を守るためじゃない」

これは私の大好きな漫画『ワールドトリガー』の主人公・空閑遊真くが ゆうま

が、亡き父から受けた言葉である。たしかに原型的なルールは、個人よりは集団生活を秩序づけ、円滑えんかつに「回す」ためのものである。

② わかりやすい身近な例は、交通ルールである。自動車も歩行者も信

号の「進め・止まれ」や進行方向を守らなければ事故が多発して混乱

する。だから交通ルールには道徳的な善し悪しや個人の思想信条は関

係なく、皆従みなわねばならない（あおり運転犯になりたいなら別とし

て）。

このように、集団行動を衝突しょうとつなく整然と進める技術的なルールと

いうものがまずある。これらは社会や世界を円滑に回すためのものだが、同時に、各人が安全に暮らせることにもつながる。

C

、航空機に搭乗する時には、機内持ち込みができないものがあらかじめ決められている。ハサミ、ナイフなどの刃物類、ゴルフクラブ、先のとがったもの、スタンガンなどである。航空機は空中の密室である。そんな中でこれらは凶器になりうる可能性があるからだ。中には「自分は温厚で常識のある人間だから凶器には絶対しない。だからカスタマイズした世界唯一の愛するナイフを持ち込ませてくれ」という乗客もいるだろう。しかし本人がそう思っていたとしても、空中で性格が豹変するかも知れない。万が一でも機内でナイフを振り回されては大変なことになる。他の乗客や機長ら乗務員の安全を確保するため、何より本人が凶悪犯にならないためにも、このルールには従わねばならないのだ。

個人の自己主張や特殊性よりも、③全体の秩序を尊重する思想もある。古代ギリシアのアテナイというポリス（都市国家）の市民裁判で、不当判決で死刑を命じられた哲学者ソクラテスは、不当判決に従わないという闘いをするのではなく、祖国の裁判が命じたことにあえて従うことこそが国の秩序を保つとして、死刑を受け入れた。彼がそうした理由は、次のような考えにあった。ひとつは、自らも含めアテナイの市民ひとりひとりに、こんな不当判決を出すほどに墮落した自らの責任を反省してほしいということ、もうひとつは、祖国の法や判決へ

の不服従はやがて法秩序を破綻させることにつながるから、とりあえず私情を捨てて服従すべきだということ（悪しき法は破ることによってでなく、議論と説得によって改正すべきである）である。

現代の個人主義的な考え方からすれば、腐敗した祖国の秩序維持のために罪なき個人が犠牲になるなんて、信じられないことだ。私なら絶対逃げる。だが秩序とルールが遵守されてこそ国は安定する。やはり集団生活を整然と送ることを個人の事情より優先するという思考もある。

とはいえ、全体の秩序とルールを守るために、個人がどこまでも犠牲になっていいわけではない。国のルールが個人よりも優先されるべき限度とは、はたしてどこまでなのだろうか？

（中略）

自然状態では、個人は自分が生き延びること、すなわち「自己保存」を図る自然権を行使してよいと論じたのが、17世紀イングランドの哲学者トマス・ホブズである。彼は自然状態を「万人が万人に対して狼である」状態、つまり各人が他人の敵意に怯え、裏切られ傷つけられ奪われ殺されることを避けようとしている状態であると考えた。それはつまり、自分が生き延びるためには、必要ならば他人を踏み台にしたり、自分に襲いかかる者に反撃し、殺しても構わないということである。戦争のように秩序が失われた状態では、各人が自分の「自己保存」を図るための自然権を行使して構わないというように。

一見するとむちゃくちゃなようだが、緊急時においては④合理的なルールになる。たとえば突然の大津波が襲ってきた場合には、沿岸部に住む人々は自分の周辺の幼い子供や高齢者、病人などを助けることなく、とにかくひとりで高台を目指して逃げろというルールが起動する。老若男女誰であらうと、とにかく自分だけが助かることを考えて各自で同じ高台へ逃げるのである。

非情にみえるだろうが、人々が助け合うことで時間をとられているうちにも津波は高速で押し寄せ、多くの被害者を出すのである。自分が助かることだけに各人が専心して、1秒でも早く高い所に逃げた方が結果的に多くの人が助かって、あとで家族らと再会できる。昔から津波の被害を受けてきた東北沿岸部の住人たちが自らの経験に基づいて獲得した知恵であり、「津波でんでんこ」という。

(住吉雅美『ルールはそもそもなんのためにあるのか』)

問一  A ・  B ・  C に入る語として、最も適当なものを、次のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア なぜなら      イ しかし  
ウ では          エ さらに  
オ たとえば

問二 ——— 線①「人類どころか、野生の動物にも、言語がなくてもルールはある」とありますが、「人類」が「動物」と異なる点について説明として最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 人の手によって秩序を構築し、その秩序を保つために、人為的なルールを設定した点。  
イ 人間が社会的な秩序を築き、その秩序を破壊するために、差別的なルールを作った点。  
ウ 人間が個人に依存した秩序を設け、その秩序を模倣するために、独善的なルールを作った点。  
エ 人の手によって秩序を生み出し、その秩序を維持するため、原型的なルールを作った点。

問三  X にあてはまる最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 集団      イ 政府  
ウ 法律      エ 言語

問四 ――線②「わかりやすい身近な例は、交通ルールである」とあ

りますが、その他の例として適当でないものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 歩きながら利用してはならないというスマートフォン利用のルール。

イ 乗車する前に降りる人を優先するという公共交通機関のルール。

ウ 割り込まずに列の一番後ろから並ぶという人気飲食店のルール。

エ 毎朝早くに登校して苦手教科の勉強をしなければならないという学校のルール。

問五 ――線③「全体の秩序を尊重する思想」について、後の問に

答えなさい。

(1) 反対の思想を本文中から九字で抜き出しなさい。

(2) 「全体の秩序を尊重する思想」とはどのようなものですか。五十文字以内で説明しなさい。

問六 ――線④「合理的なルール」とありますが、どのようなルール

ですか。「ㄱ」というルール」に続くように本文中から十九字で抜き出しなさい。

問七 本文全体の内容として正しいものを、次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、種の生存能力を増大させるために役立つ序列付けというルールを獲得し、動物とは異なるルールを発展させていった。

イ 個人が安心して暮らすためには、集団生活を阻害せず、道徳的な善し悪しや個人の思想信条は関係なく、執行されるルールに従う必要がある。

ウ ソクラテスは市民裁判の不当判決である死刑を、法・秩序を守るために受け入れたことにより、アテナイの市民は自分たちの過ちを反省した。

エ 秩序が失われる非常事態においては、全員で助け合うより、必要ならば他人を踏み台にして生き延びようとしてもやむを得ない。

四

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

カンダさんと初めて会ったのは、四年生の三学期、雪の積もった日曜日だった。

少年は朝ごはんもそこそこに近所の公園に出かけて、友だちと一緒に雪だるまをつくって遊んでいた。雪だるまのおながができあがった頃、久美子ねえちゃんが公園の横を通りかかった。

「ヨウくん、寒くない？」

ご機嫌な声で久美子ねえちゃんは言った。

「どこか遊びに行くの？」と少年が訊くと、「駅まで友だちを迎えに行くの」と笑って答え、待ち合わせまでまだ時間があるのだろうか、公園の中に入ってきた。

「友だちって、会社のひと？」

久美子ねえちゃんと同じ会社の「友だち」なら、何人か知っている。若い女のひとばかりだ。一度、みんなでお花見に出かけたときに、「ヨウくんもおいでよ」と連れて行ってもらった。久美子ねえちゃんは少年を「わたしのカレシ」と紹介して、①少年が頬を真っ赤にすると、みんなはおかしそうに笑った。

「うーんとねえ、ちょっと違うかな。会社も違うし、『友だち』っていうのじゃないかな、やっぱり」

久美子ねえちゃんはずぐったそうに肩をすくめ、ほんの少し照れ

くさそうな顔になった。それで A と来た。だから逆に、当たってほしくないと思いながら、「カレシ？」と訊いてみた。

「やだあ」と久美子ねえちゃんは笑った。「ヨウくん、そんな言葉まだ覚えなくていいの」と少年の肩を軽くぶつ真似をして、「じゃあね」と公園を出て行った。「違う」とは言わなかった。それが答えだった。正解してもあまりうれしくないクイズもあるんだと、少年はそのとき初めて知った。

それからしばらくたって、久美子ねえちゃんは男のひとと二人で公園に戻ってきた。久美子ねえちゃんはぶんぶん怒っていて、男のひとはしょんぼりとしていた。

「お父さんも待ってるんだから、いまさらなに言ってるのよ」「いや、行くよ、行くけど、ちょっと心の準備っていうか」「緊張してるのはこっちだって同じよ。もっとしつかりしてよ」「うん、わかる、わかってる、だいじょうぶ、ちょっとだけ休んだら行けるから」「情けないなあ」……。

そんなやり取りのあと、久美子ねえちゃんは少年に「ヨウくん、雪合戦しよう。このお兄さんにぶつけてやって」と言った。「カンダさんっていうんだけど、いいよ、やっちゃって」

カンダさんは B として、少年に「タンマ、タンマ」と言った。「いいから、ヨウくん、やっちゃって。みんなもぶつけていいわよ」——少年はすかさず雪玉をつくって、力いっぱい放った。カンダ

さんの肩に当たった。それがきっかけになって、友だちもいっせいに雪玉をぶつけた。途中からは、久美子ねえちゃんの雪玉も加わった。うひゃあ、やめてくれえ、とカンダさんは笑いながら逃げまわった。友だちも歓声をあげてカンダさんを追いかけた。久美子ねえちゃんも笑っていた。少年だって笑った。うれしくてしょうがなかった。このひとが久美子ねえちゃんのカレシでよかったな、と思った。

雪玉に泥が混じりだした頃、久美子ねえちゃんは「はい、もう、おしまーい」と言っ、て、カンダさんのコートについた雪をていねいに払った。カンダさんは少年をそばに呼んで「サンキュー、走り回ったおかげで、緊張がほぐれたよ」と握手をしてくれた。「ヨウくんは俺の恩人だから、これからもよろしくな」——そんなことを言ってくれるおとなは、初めてだった。

春になると、カンダさんは日曜日のたびに久美子ねえちゃんの家遊びにきた。もう結納の日取りを決めるところまで進んでいるんだと、母から聞いた。

少年とカンダさんもどんどん仲良くなった。久美子ねえちゃんの家を訪ねるときには、カンダさんは必ず少年とも遊んでくれた。

「ヨウくんのこと、大好きなんだって」久美子ねえちゃんが教えてくれた。「もともと子どもが好きだし、ヨウくんとは遊んでると田舎にいる弟のこととも思いだすんだって」

カンダさんは、スポーツはあまり得意ではなかった。キャッチボールをやってもサッカーをやっても、同級生の友だちのほうがずっとうまい。そのかわり、プラモデル作りを手伝ってもらうときには、少年はいつも目を大きく開いてカンダさんの指先を見つめた。少年が作るどうしても接着剤がはみ出してしまう細かい部分も、カンダさんは魔法か手品のようにきれいに仕上げてくれる。

プラモデル作りに夢中になってしまい、久美子ねえちゃんが「なにやってるの？ もうごはんできて、みんな待ってるのよ」と迎えに来ることもしょっちゅうだった。そんなときにはいつも、カンダさんは少年に目配せして、いけねつ、と肩をすくめる。部屋を出るときにも、また今度な、と笑う。その「また今度」が、同じ日だったこともある。おじさんとお酒を飲んだあと、帰りに少年の家に寄って「レーダーのところは難しいから、俺がやっというてやるよ」と作りかけの軍艦のプラモデルを箱から取り出し、一緒にいた久美子ねえちゃんが「用事があるから早く帰るって、このことだったの？」とあきれかえると、えへへっ、といたずらっぽく笑う。

② カンダさんは、そういうひとだった。

そして、そういうひととは、おとなの世界ではあまりほめられないんだということを、五年生になった少年はうっすらと察していた。

「どうもねえ、おとなと会うより子どもと会ってるほうが楽しそうだなんでねえ……いくらいいいひとだっていっても、あれじゃあちよつと

ねえ……」

母はため息をついていた。

「久美子ちゃんもアレだな、だいじょうぶなのかなあ、どうも頼りないからなあ」

父もなんとなくカンダさんのことを気に入っていない様子で、それはきつと、久美子ねえちゃんの両親も同じなのだろう。

でも、少年にとっては、久美子ねえちゃんが歳の離れたお姉さんなら、カンダさんは歳の離れたお兄さんだった。大好きなお兄さんができた。それだけで、よかった。

五月の連休中に、久美子ねえちゃんに「明日、動物園に行くんだけど、ヨウくんも一緒に行かない？」と誘われた。

「カンダさんもいるの？」

「彼が言ったの、ヨウくんも誘おうって」

少年は、やったあ、と跳び上がって喜んだが、両親はいい顔をしなかった。「ほんとに久美子ちゃんがそう言ったんだな」と父は何度も念を押し、母はもつとしつこく「ほかになにか言っていなかった？ それだけだった？」と訊いてきた。

「行っっていいでしょ？」

両親は顔を見合わせ、父が黙ってうなずくと、母もやっと「いいわよ、二人の邪魔しないようにね」と言った。

動物園は楽しかった。

カンダさんも久美子ねえちゃんも、にこにこ笑って、動物の檻をひとつずつゆつくりと時間をかけて巡っていった。

途中で手をつないだ。右手をカンダさんと、左手を久美子ねえちゃんと——五年生になってからは両親と手をつなぐことは一度もなかったが、カンダさんと久美子ねえちゃんとなら手をつないでも恥ずかしくなかった。

帰りの電車も、少年を真ん中にして三人並んで座った。電車の揺れに身を任せているうちに、少年はうたた寝をしてしまった。夢の中でカンダさんと久美子ねえちゃんの話し声が聞こえた。久美子ねえちゃんは怒った声で……違う、涙ぐんだ声でなにか言っていた。カンダさんの言葉は聞き取れなかったが、声の調子で、謝ったり言い訳をしたりしているんだ、と感じた。どうしたの？ と訊きたかったが、訊いてはいけないんだ、とも思った。そう思ったのも、夢の中のことだっただろうか。

「ヨウくん、次降りるよ、駅だよ」と揺り起こされた。

久美子ねえちゃんは泣いていなかった。涙の名残もない。だが、少年の隣には、カンダさんではなく知らないおばさんが座っていた。

「カンダさんは？」

「帰った。途中だったの、降りる駅」

「……起こしてくればよかったのに」

幼い子どもがすねるように言うと、久美子ねえちゃんは「ごめんね」と笑った。泣き顔のような笑顔だった。

「でも……いいや、どうせ来週また会えるもんね」と少年は言った。おそろおそろ、にならないように気をつけて。

③ 久美子ねえちゃんはさつきと同じ顔で笑うだけで、なにも応えてはくれなかった。

連休が明けると、カンダさんが姿を見せない日曜日が増えてきた。カンダさんが帰ったあとの隣の家からおじさんと久美子ねえちゃんが言い争う声が聞こえてくるようになったし、隣のおばさんが夜中にわが家を訪ねて両親と長い時間話し込むこともあった。

それでも、④ カンダさんは、隣の家を訪ねたときには必ず少年の家にも寄った。父は居間にこもったままで、母もお茶を出さない。冷ややかな空気の中、カンダさんは少年の部屋に入るとほととしたように肩の力を抜いて、「プラモ、どこまで進んだ？」と笑う。少年は作りかけのプラモデルを箱から出して、「ここまで」と言う。言葉を交わすのは、それだけだった。

カンダさんは黙々とプラモデルを作りつづけた。最初は難しいところを手伝うだけのはずだったのに、少年には手出しさせず、話しかけてもこないで、一心に指を動かして軍艦や戦車を作りつづけた。

久美子ねえちゃんは、もう、カンダさんを迎えには来なかった。

結婚の話がこわれた。

カンダさんの実家が反対したせいだ、と少年は両親から聞いた。

カンダさんの実家は東京から遠く離れた町で商売を営んでいて、長男のカンダさんはいずれは帰郷して家業を継ぐ——プロポーズしたときには「家のほうは弟に任せるから」と言っていたのに、実家の猛反対と説得を受けて、決心が揺らいだ。久美子ねえちゃんはいまの仕事辞めるつもりも東京から離れるつもりもなかった。板挟みになったカンダさんは、優柔不断な態度をとりつづけて、結論を先延ばしにしたすえに、結局、久美子ねえちゃんではなく実家のほうを選んだ。

「もう遊びに来ないの？」

少年が訊くと、母は「あたりまえでしょ、顔なんて出せないわよ」と吐き捨てるように言った。「あんただってそう思うでしょう？ 久美子ちゃんは裏切られたのよ、あの男に、そんなの許せないでしょう？」

梅雨入りして間もない頃——金曜日から降りつづいていた雨がようやくあがった日曜日の夕方、友だちの家で遊んできた少年が帰り道に公園の脇を通りかかったら、背広姿のカンダさんがいた。

いつものように「おつす」と照れくさそうに挨拶したカンダさんは、「ここで待ってたら会えるんじゃないかなって」と笑った。

少年は笑い返さない。頬をこわばらせたまま、カンダさんから顔をそむけて、「おねえちゃんちに行ったの？」と訊いた。

「行っただけ、会えなかった。ヨウくんの家にも寄ったんだけど、おばさんに怒られちゃったよ」

「……ふうん」

「もう来ないと思うんだ、ここには。だからヨウくんに、さよならって言いたくて」

少年は公園の植え込みのアジサイをじっと、にらむように見つめる。

「いままでありがとう」

カンダさんの差し出す右手が視界の隅をちらりとよぎったが、少年は顔を向けず、バイバイ、と口を小さく動かすだけだった。

カンダさんもすぐに手をひっこめて、「プラモ、どこまで進んだ？」と訊いた。

「壊した」

少年はそっけなく言って、頭の中でアジサイの花びらの数をかぞえていった。

カンダさんは黙って公園を出て行った。

花びらを三十まで数えたところで、少年はその場にしゃがみ込み、雨で濡れた地面を手で掻いて、泥玉をつくった。

カンダさんの背中めがけて、泥玉を放った。

当たらなかった。泥玉はカンダさんの足元ではじけてしまった。

振り向いたカンダさんは怒らなかった。そのかわり、雪合戦のときのように逃げてもくれなかった。じゃあな、と笑って、また歩きだして、ほどなく背中が夕闇に消えた。

(重松清『カンダさん』)

問一 ――線①「少年が頬を真っ赤にする」とありますが、この時の

「少年」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 年上の女性たちに「カレシ」とからかわれ、気恥ずかしさと少しのうれしさが入り混じって照れている。

イ 「久美子ねえちゃん」の発言に強い怒りを覚え、その場を立ち去りたいほど不快になっている。

ウ みんなの前で急に「カレシ」と紹介され、注目を浴びて戸惑い、緊張で頬が熱くなっている。

エ 見知らぬ人たちに囲まれて恐ろしくなり、今すぐ帰りたいと感じている。

問二

A

B

に入る語として最も適当なものを、次の

ア～エよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A

ア グッ

イ ピン

ウ ジーン

エ カチン

B

ア はっ

イ じっ

ウ ぼーっ

エ ぎよっ

問三

——線②「カンダさんは、そういうひと」とありますが、「カ

ンダさん」はどのような人物として描かれていますか。「少年」

と、「少年の両親」それぞれの目線から、六十字以内で説明しなさい。

問四

——線③「久美子ねえちゃんはさっきと同じ顔で笑うだけで、

なにも応えてはくれなかった」とありますが、この時の「久美子」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次の

ア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 「カンダさん」と「来週また会える」という「少年」の言葉

がうれしく、あえて返事をせずに優しく微笑んだ。

イ 「カンダさん」とはもう会えないかもしれないと感じ、「少年」

を傷つけまいとして真実を言わず、笑顔でごまかした。

ウ 「少年」の無神経な言葉に腹立たしさを覚えたが、感情を抑

えるためにわざとらしく作り笑いをした。

エ 歩き疲れてうまく反応ができず、とりあえず笑って腹の内は

見せず、その場を適当にやり過ごした。

問五 ――線④「カンダさんは、隣の家を訪ねたときには必ず少年の

家にも寄った」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 「少年」の両親と腰を据えて語り合い、温かいもてなしを受けながら関係を深めるため。

イ 「少年」の甘えを正す目的で作業を止めさせ、厳しく叱ってプラモデルを取り上げるため。

ウ 隣家とのいざこざから距離を置き、「少年」の部屋でプラモデル作りに没頭して気持ちを落ち着かせるため。

エ 「少年」のプラモデルを自分が代わりに作り進めたいと考え、その制作に集中する時間を得るため。

問六 この小説の出来事は、およそどのくらいの期間にわたって

起こっていますか。最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 二か月      イ 五か月

ウ 八か月      エ 十一か月

問七 この小説の中で、プラモデルは何を象徴していますか。最も

適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア 「少年」が複雑な大人の世界へと踏み出し、精神的に成長していくことの象徴。

イ 「久美子ねえちゃん」と「カンダさん」の結婚準備の順調さの象徴。

ウ 「カンダさん」の大人としての責任と、家庭を築いていく覚悟の象徴。

エ 「カンダさん」にとって「少年」と言葉少なに共有する安心の時間の象徴。

問八 この小説の表現の特徴として最も適当なものを、次のア～エより選び、記号で答えなさい。

- ア 語り手が登場人物全員の心の中を語り、作者の言いたいことを伝えている。
- イ 過去を振り返る形式で語られ、起こった出来事一つひとつを細かく描写している。
- ウ 登場人物の会話を通して、「少年」の視点から物事をとらえて心情を表現している。
- エ 情景描写と比喩<sup>ひゆ</sup>を多用し、登場人物の会話は最小限に抑えられている。

